

「ス	トロ	ベリ	ー	
セ	ッ	シ	ョ	ン
湯	ノ	浦	ユ	ウ

「うぎゃー！」

そんな声を日常の中でそんなに聞くことがないのは私の世界が平和なだけだからだ。

毎日何も変わらない。

何の変哲もない時間が繰り返されていくだけ。

私の世界は普遍的だ。

別に飽きたわけでもないし。刺激が欲しいとか毎日つまらなさを感じているわけでもない。

じゃあ何なのって話だよ。

何なんだろう。

何なんだよ、はっきりしないなあ。

うーん……。

あははははは。

分かんないやー。

まあいいや、そんなこと。

もうすぐ夜が明ける。

今日も一日が始まる。

いつものことになりつつあるけど、またちゃんと眠れなかった。

学校行って眠ればいいのか、なんて生温い考えを持って私は起き上がる。

多分だけど高校生の大半が私の考えと大して変わらないだろう。

それじゃあ世の中良くなるわけもないよね。

まあ、私が言えたことじゃないか。

朝ごはん食べて、登校して、友達と話して、つまらない授業聞いて、お昼食べて、午後は少しサボって、下校する。それが毎日の緩やかな流れ。

私がブレまくりなのに対して大きなブレもなく時間は経過していく。

ちょっと残酷だ。

そして複雑だ。

あはははははは。

本当に笑えないことばかりで困るな。

こんな私でもやがて夜を迎える。

夜はいつも一人では居られない。

一応私も一人になると寂しいんだ。

そんな時に彼氏がいてくれて本当に助かっていた。

「そこに愛はあるかい？」、なんて聞かれたら困ってしまうし、「愛し合ってるかい？」なんて忌野清志郎の決め台詞をテレビで見るたびに自分が見透かされている様な気持ちになった。

夜も深くなった頃、高校生には似合いそうもないホテル街に私は彼氏と向かった。

こんなモノの繰り返し。

私は何だかんだとって誰かの腕の中にいられることで、ただ平和という安心感を勝ち取りたいだけなんじゃないだろうか。

そうだったとしたら何ともつまらない。

私はそんなことを考えながら腕の中で眠った。

「どかーんっ！」

全国的に朝。

何だかいつもと少し違う気がした寝覚めだった。

隣にあの人はいない。

体を起こしてみると、あの人はテレビを眺めているところだった。

「何とかって国のビルに飛行機が突っ込んだらしくてさー！」

興奮したように身振り手振りを加えて私に説明してくれる。

それを聞いて、私は何かが始まった気がした。

テレビのニュースではビルに飛行機が突っ込んでいく映像が何度も繰り返し放送されている。

点と点を繋ぐように、綺麗に、吸い込まれるように飛行機は碎け散った。

あはははははは。

本当にそんなことしたら笑えないじゃんか。

目の前に広がるモノが嘘みたいだ。

「うぎゃー！」

映像からそんな声が聞こえてくるみたい。

そんな声を毎日の中でそんなに聞くことがなかったのは私の世界が平和なだけだったからだ。

繰り返された毎日は終わって新しい日々が始まる。

始まってしまった。

平和な私の世界は終わってしまっ、て、「うぎゃー！」って私自身が言いたくなるような世界に変わってしまった。

刺激を求めるなんて、甘い罠だったんだ。

まもなく戦いが始まる。

あはははははは。

笑うしかないや。

「おいおい、どうなっちゃうんだよー」

心配そうにテレビを見つめる彼とは逆に、

「あはは、なんだか花火みたいだね」

私は盛大に笑い飛ばしてやった。